「認知症支援」から「共生社会」の実現を目指して

『オレンジカフェさいき』スタッフ・認知症サポート医 山内勇人

地域づくりへの熱い想いと使命感、気合から有志で立ち上げ、ボランティアで継続中のカフェです(代表 前田修二)。開催 60 回を越え、のべ 1,500 人以上が参加して盛会に続いている理由は、予想以上に自分達が楽しく、笑顔になり、元気や活力が生まれるから…互いに影響し合える良い循環がここにはあるからです。

カフェ開設・運営において大切なことは、話し合って『理念』をつくり、関わる人たちが共有することだと思います。それは決して難しい内容のものではなく、例えば私たちは、「楽しい」「笑顔づくり」の場を提供すること、そしてお客さんもスタッフも「来て良かった」と思って頂けるように心掛けることとしました。

ここでは、参加者全員が、互いを「さん」付けで呼び合います。また、認知症に限らず、障がいの種別を超えて誰もが参加できる場であることも特徴です。認知症は元より、地域の中に居場所がない精神障がい者も集える場にしたいと開設時より取り組んできました。疾患の勉強から入るのではなく、ひとりの人として接することで「病気が個性に変わる」ことを皆が学びました。今では、精神障がい以外にも、引きこもり、視覚障がい、身体障がい等の様々な“生きづらさ”を抱えた人たちが、ひとりの尊い人として、同じ場、時間を共有しています。

つまり、認知症や障がいの有無、職種も関係ないのです。「ひとりの人」として接すること、過ごせることに重きを置き、「支援される側」「支援する側」に分かれるのではなく、誰もがひとりの尊い人として過ごし、互いに支え・支えられる構図がここにはあります。

また、スタッフに地元高校生がいることで、世代を越えた交流ができ、カフェに活気と明るい地域の未来を予感させてくれます。『オレンジカフェさいき』の一番の魅力は、この「ごちゃまぜの心地よさ」にあると言えます。

社会福祉制度での縦割りサービスでは形成することのできない横のつながりを、民間の協働により地域資源を掘り起こしながら作り出しているのがこの『オレンジカフェさいき』です。これから、人口減少、支える側の生産年齢人口減少が問題となります。そんな中、病気、障がい、年齢、性別、職業といった背景や立場を超えて、誰もが尊いひとりの人として必要とされ、役割が与えられ、感謝され、自分らしく生きることができる“共生社会”の小さなロールモデルをこれからも発信していきたいと思います。